

幸府画報

絵師調査事業
広報誌
第 7 号
2021 年 7 月
(令和 3 年)
発行
太宰府市教育委員会
文化財課

調査見聞 吉嗣拝山の清国渡航

拝山、清国で筆談する

拝山は、明治11（1878）年、清国に渡航、上海をはじめ揚州・蘇州・杭州を歴遊し、また同地の文人墨客とも交流しています。現在、絵師調査事業で調査を進めている吉嗣家資料のなかには、この時の清国渡航についての貴重な資料が含まれています。ひとつは、「筆舌簿」「以筆換談」などと題された、主に現地の文人墨客との筆談を記した「筆談録」4冊です（写真1）。いまひとつは、清国滞在中に名所旧跡を訪ねた際など、折々に拝山が詠じた漢詩を収めた「江南游草」（写真2）の草稿本が複数

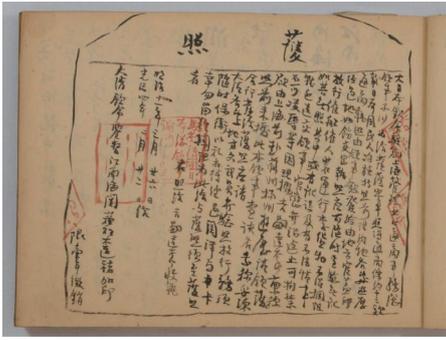


写真1 「筆談録」所載の護照（旅券）
吉嗣家資料

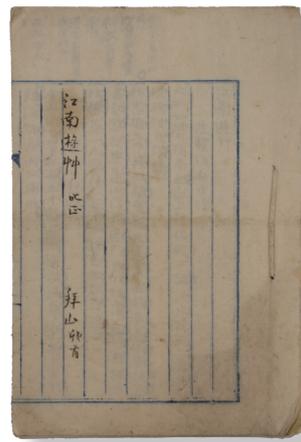


写真2 「江南游草」吉嗣家資料

数存在します。これらは、拝山が現地の文人墨客らに叱正を依頼した時のものと考えられます。最後に「骨筆題詠」です。拝山は不慮の事故によって右手を失いましたが、明治5年（1872）年、その骨を使って「骨筆」を制作しました。今回の渡航にはこれを持参しており、「骨筆題詠」は清国の文人墨客などがそれを目の当たりにして詠じた詩編を収めたものです。わたくしは以前、これらの資料群から、拝山の清国における旅程の復元を試みたことがあります。

拝山の日本観や思想もわかる

このうち「筆談録」には、文人墨客との交流のなかで拝山の思想的な側面、日本の政治・制度・文化・風俗・慣習、あるいは地理に関する説明を含むなど、拝山研究のうえできわめて貴重であるといえます。ただ、その資

料の性格上、複数の人物の筆が入っており、またその場に居合わせた人びとにとって自明なことから、「筆談録」の記述にはあらわれないところから、隔靴搔痒の感を免れない箇所も少なくありませんでした。

既存資料を補完する日記を確認

ところが、この絵師調査事業に関連して吉嗣家資料を精査していたところ、別にこの時の日記が遺されていることに気づきました。「日間些事記」〈戊寅〉（写真3）と題された資料がそれです。干支の戊寅は、明治11年にあたります。この年の旧暦正月元旦である2月2日に始まって、7月31日で終わっており、拝山の清国滞在の全期間を含んでいます。この資料によつて、先述の旅程復元では3月下旬としていた上海到着は3月21日のことであつたと、日付まで確定することができます。さらにまた、「某来る、筆談すること数刻」「某来る、数刻筆舌す」などの記述があり、「筆談録」との対照によつて、誰との筆談であつたかが判明する可能性があります。このように、吉嗣家資料の調査によつて、拝山に関する新たな知見がさらに加わることが期待されます。（重松敏彦・太宰府市公文書館）



写真3 「日間些事記」吉嗣家資料

メイシヨ メイブツ

きぬかけてんまんくう 衣掛天満宮の扁額

水城跡近く、国分2丁目に位置する衣掛天満宮は、菅原道真を祭神とする神社です。この地域には、「右大臣の地位から突然大宰権帥として左遷されてきた道真が、長旅の末にやつと大宰府の入口である水城に着き、旅衣を脱いでかたわらの松（または石）に掛け、新しい衣に着替えた」などの伝承が残っています。お宮の由来は複数説があるものの、この故事により社を建てたとする説がよく知られています。

道真が衣を掛けた松がどれなのかは定かではありませんが、一つの説である裏山の神木は昭和28年（1953）に枯れてしまったため、その木材を使つてお宮の扁額などが作られました。現在、拝殿の正面にかかる扁額には鮮やかな墨書きで衣掛天満宮の名が記されているほか、「神木老松之材」「鼓山謹書」とあり、絵師吉嗣家三代・鼓山の筆であることが分かります。鼓山によつて新たな命が吹き込まれたことで、人々に大切にされてきた神木を今なお身近に感じることが出来ます。（高松麻美・太宰府市文化ふれあい館）



(上) 衣掛天満宮の扁額
(下) 衣掛天満宮拝殿

逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介いたします

齋藤梅圃作

【福間浦鰯漁図絵馬】

謎多き後継者

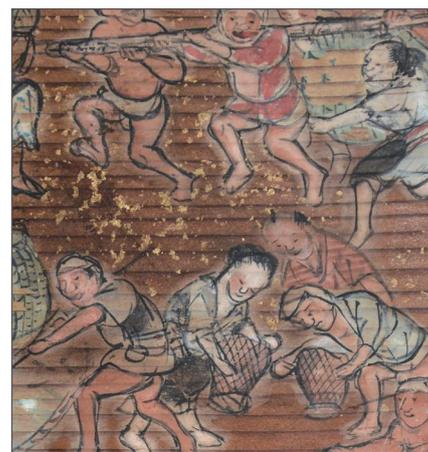
齋藤秋圃の三男で、幼い頃から父について絵を描き、のちに齋藤家を継いだ梅圃（1816〜75）の作品です。多作だった秋圃と比べて現存作品は少なく、梅圃の活動の実態についてはいまだ不明な点が多くあります。そのような中で、福津市には本作品を含めて3点の梅圃作品が現存しており、当地と梅圃との関わりが注目されます。

超大漁の記念絵馬

画面右上に梅圃の落款と印章があり、裏面には、大宮司阿波守和繁以下、庄屋や



板絵着色 146 × 222cm 安政4年(1857)奉納 福津市・諏訪神社蔵 福岡県指定文化財



絵馬の部分図

世話人など20名の関係者の名前と、「于時安政四丁巳四月九日同日廿日鰯大漁真図五月十五日奉掲」との墨書があつて、この絵馬が二度にわたる鰯の大漁を記念して奉納されたことを示しています。

陸、海、空を水平に区切った画面には、向かって右手に津屋崎の渡半島、左手には海ノ中道、水平線上には相島や玄海島なども見え、にぎやかな漁の様子や大漁に沸く大勢の人々の姿がづぶさに描かれています。奉納の契機や関係者の名前、そして当時の漁の様子や人々の風俗を活写している点が評価され、福岡県の有形民俗文化財に指定されています。

父親ゆずりの人物表現

網を引く人、とれた鰯を運ぶ人、通りすがりの旅人など、描かれる人物は500人近くに及びますが、いずれの人物も動きは様々、表情は豊かに描き分けられていて見飽きません。五頭身ほどの小柄な体型や、瞳を描かないたれ目の目、カタカナのム字を丸くしたような鼻など、柔和な雰囲気をもたせつつ表現は父親ゆずり。梅圃の作風を具体的に考える上で基準となる逸品です。（井形栄子）

いちまい 画稿鑑賞

齋藤家資料 【仙厓像】



紙本墨画 26.8 × 36.5cm 天保年間

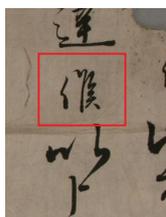
様々な人物の肖像が綴られた冊子「人物図冊」の1頁に、禅画で有名な博多・聖福寺の和尚、仙厓の姿がいくつか描かれています。正座して微笑を浮かべる姿や、繩床（椅子）にもたれる姿、画面上部には顔面部のスケッチもみられます。画中の「筑前／聖福寺／仙厓和尚／八十九歳／天保年間」の墨書から、天保8年（1837）に没した仙厓の晩年の姿を描いていることが分かります。仙厓と親交があつた秋圃の筆によるものでしょう。

秋圃は仙厓の死後、2点の肖像画を制作していますが、本画稿の繩床に座る仙厓像は、そのうち《仙厓和尚繩床図》（聖福寺蔵）と構図が一致します。つまり、このスケッチは肖像画の構想段階のものである可能性があります。友人であつた秋圃ならではの生き生きと真に迫った描写で、仙厓の実像を今に伝えてくれる、貴重な画稿です。（日野綾子・九州歴史資料館）

ひとこと ぐずし字

【候】

古文書を読む中で最頻出と言つても良いのが今回ご紹介する「候」です。「〜です。〜ます。」を表す丁寧語で、文末に使用されることが多い文字です。崩し方は様々で、比較的形を残したもののから、省略されると点のようになり、一字では読むことも困難となります。



秋圃の秋月藩での任官と扶持に関する覚書（右）と御役御免の達書（左）。いずれも齋藤家資料。

「〜です。〜ます。」と推測できます。このように前後の文字や文脈から「候」かどうか判断します。室町時代から江戸時代にかけて手習書として普及した『庭訓往来』に「候」を用いた文例が多く取り入れられたことから、文中に「候」を使用する「候文」が手紙の主流となりました。崩し字で読めない字があつたら前後の文字を見ながら「候」の可能性を検討ください。（木村純也）